

## 名詞句の探索領域とコピュラ文の疑問形

酒井 智宏

この論文では、談話処理に用いられる領域の間の結合という観点からコピュラ文の疑問形の容認可能性について論じる。

それぞれの名詞句はその限定表現により探索領域を指定する。談話において名詞句が用いられたときには各名詞句の指定するやり方で指示対象を同定しなければならない。この同定に失敗したとき、主語名詞句がメタ形式「って」でマークされた「NP って誰／何／どれ?」という疑問形が用いられる。このとき NP と疑問詞の探索領域は原則として一致するが、領域間のマッピングを前提とした場合、表面上ミスマッチが生じることがある。

一方、主語名詞句にメタ形式の付かない「NP は誰／何／どれ?」という疑問形は NP が正しく処理できた上でその指示対象の他の領域における対応物を問う疑問文である。「昨日太郎に会ったよ。」と言われて「\*太郎は誰?」と尋ねるのが不自然なのは、裸の固有名が「太郎」の指示対象を同定できたことを表す一方、「誰」がその指示対象を求めているからである。

このほか、同一の疑問形がスペース構成により異なる許容度を示すことなど、コピュラ文の疑問形に関する興味深い事実をいくつか論じる。

キーワード：メンタル・スペース理論、名詞句の探索領域、領域間のマッピング、コピュラ文の疑問形、メタ形式

### 0 はじめに

田窪 (1989, 1990)は談話管理理論の立場から日本語の裸の固有名が言語記号の名前、意味、指示対象のすべてを知っているときにしか使えず、意味または指示対象が分からないときにはメタ形式「って」の使用が義務的になると述べている。田窪が論じているのは主に固有名詞に関してであるが、これを名詞句一般に当てはまる制約と考えているようである。これは直感的に正しいと思われる制約であり、次の事実を説明することができる。

- (1) A: 昨日太郎に会ったよ。  
 B: 太郎{って/\*は}誰?
- (2) A: さっきヒグラシが鳴いてたよ。  
 B: ヒグラシ{って/\*は}何?
- (3) A: 昨日あいつを見たよ。  
 B: あいつ{って/\*は}誰?

ところが、指示対象の分からない名詞句でも、他人の用いた名詞句でなければメタ形式は使えない。

- (4) 今急に疑問に思ったんだけど、一体あの事件の犯人{\*って/は}誰?  
 メタ形式は一種の引用形式であるから、(4)のように他人の言葉を受けていない場合にこれが使えないのは不思議ではない<sup>1)</sup>。しかし、(4)の質問者が「あの事件の犯人」の指示対象を知らないことによりはならず、なぜ(4)においてメタ形式が必要ないかは田窪の制約では説明できない。

この論文では、坂原 (1996)の提案する複数領域からなる談話資源を持つ談話処理モデルを発展させた名詞句解釈のモデルの大枠を提示し、そのモデルに基づいてコンピュータの疑問形について論じ、上の事実を説明する。

## 1 談話における名詞句の処理と名詞句の探索領域

### 1. 1 談話における名詞句の処理

メンタル・スペース理論(Fauconnier 1985, 1997)の主張の一つは、言語表現はメンタル・スペース構築に対する指令であるというものである。この考え方からすると、名詞句の機能は談話スペース内に要素を導入することと談話資源(一般的知識領域、談話スペース、現場スペースからなる)内の要素を同定することである。坂原 (1996)は、名詞句はその限定表現により探索領域が決まっているという考え方を示し、日本語の裸名詞はすべての談話資源を探索し、指示詞句は現場スペースと談話スペースを探索するとしている<sup>2)</sup>。

本稿ではこの路線に沿って、名詞句は談話スペースへの書き込み指令であると捉える。談話における名詞句の処理は具体的には次のようになる。第一に、名詞句 X は、定名詞句であれ不定名詞句であれ、談

話資源内の要素 X' と同定される。第二に談話スペースに X' の対応物 X'' が書き込まれ、X' と X'' はコネクタで結合される。これはすべての名詞句に共通の手続きであるが、第一段階で X と X' とが同定される方法および第二段階で X' と X'' との間に設定されるコネクタの種類は名詞句により異なる。これについては 1.3 節から 1.5 節で論じる。

話し手は、上のやり方で聞き手が処理することができると想定される名詞句のみを用いなければならない。また、当然のことながら、話し手は自分自身の談話資源内にある要素と同定された名詞句のみを用いることができる。

## 1. 2 一般的知識領域内に登録されている要素

ここでは次節以下の議論の準備として、要素がどのような形で一般的知識領域に登録されているかを本稿に關係する範囲に絞って述べることにする。

要素はラベルと属性からなる。要素はさまざまな属性を持つが、属性の一部は素性-素性値の対からなっていると考えられる。本稿では素性として名前素性とカテゴリー素性とレベル素性のみを考える。例えばラベルを <> に入れ、素性と素性値を [素性: 素性値] という形で表記すると、タマ、シャム猫、猫という要素はそれぞれ次のような素性-素性値の集合として一般的知識領域に登録されている。

(5) <タマ>

[[名前: タマ]、[カテゴリー: シャム猫&猫]、[レベル: 個体]]

(6) <シャム猫>

[[名前: シャム猫]、[カテゴリー: 猫]、[レベル: 非個体]]

(7) <猫>

[[名前: 猫]、[カテゴリー: 動物]、[レベル: 非個体]]

名前はその要素に関する属性が十分得られたときにラベルとなり、ラベルが付けられたときにその要素の登録が完了する。田窪(1989,1990)の言うように、談話において名前は「という」で導入される。上で「シャム猫」や「猫」を名前と考えたのは、(8)の並行性を反映させるためである。

(8) a. タマというシャム猫 (または、タマという猫)

b. シヤム猫という猫

c. 猫という動物

名詞句「A いう B」において A はこの名詞句全体の指示対象の名前素性の値を表し、B はその対象のカテゴリー素性の値を表す。

次にレベル素性について述べると、非個体とは個体をメンバーに持つ要素のことであり、個体とは個体のメンバーを持たない要素のことである。固有名詞はすべて[レベル: 個体]である。述語には非個体に適用されるものと個体に適用されるものがある。例えば「絶滅する」、「増える」などの述語は非個体に適用されるが、「歩く」、「死ぬ」などは個体に適用される<sup>3)</sup>。そこで(9)の主語はそのまま解釈すればよいが、(10)の主語には語用論関数を適用し、解釈において個体レベルの要素を計算により作り出す必要がある。この語用論関数を非個体・個体関数と呼ぼう。非個体・個体関数は、任意の X、Y について {[名前: X]、[カテゴリー: Y]、[レベル: 非個体]} という属性集合を {[名前: ?]、[カテゴリー: X]、[レベル: 個体]} という属性集合に写像する<sup>4)</sup>。(10a-b)はそれぞれ {[名前: ?]、[カテゴリー: 猫]、[レベル: 個体]}、{[名前: ?]、[カテゴリー: シヤム猫]、[レベル: 個体]}の要素についての言明である。

(9) a. 猫が絶滅する。

b. シヤム猫が増える。

(10) a. 猫が歩く。

b. シヤム猫が死ぬ。

同じ述語であっても時制・アスペクトによって主語の解釈が異なることがある。現在形の動詞を使った(11)は語りにおけるいわゆる「物語の現在」の可能性を除くと<猫>に関する言明であると解釈されるが、完了過去形を使った(12)はそうした総称解釈が不可能となり、{[名前: ?]、[カテゴリー: 猫]、[レベル: 個体]}の要素に関する言明であると解釈される。

(11) 猫はねずみを取る。

(12) 猫はねずみを取った。

2.1 節で述べるように、レベル素性は疑問代名詞の用法を記述する際にも必要である。

### 1. 3 固有名詞

田窪 (1989, 1990)の議論から、固有名詞がすでに知っている要素しか指せないのは明らかである。そこで、話し手が固有名詞「X」を用いた場合、聞き手は自分の一般的知識領域内の要素のうち、その固有名詞と同一のラベル<X>を持つ要素を同定しなければならない。その後、<X>の対応物 X'が談話スペースに書き込まれ、<X>と X'は同一性コネクター(C1)で結合される<sup>6)</sup>。談話スペースに書き込まれる要素 X'が「太郎」で指せることは一般的知識領域の<太郎>との C1 による結合に基づくアクセス原則によって保証される<sup>6)</sup>。

以上の事実を発話する側から見ると、話し手は自分の一般的知識領域に存在し、かつ聞き手の一般的知識にも存在すると想定される要素のみを固有名詞で指すことができるということになる<sup>7)</sup>。

### 1. 4 裸名詞

裸名詞も基本的には固有名詞と同様であると考えられる。裸名詞「X」を処理するためには、一般的知識領域の<X>を同定し、その対応物 X'を談話スペースに書き込み、<X>と X'を同一性コネクターC1で結合する。例えば(13)の処理において聞き手は自分の一般的知識領域の<ヒグラシ>を同定し、その C1 による対応物 X'を談話スペースに書き込む。(13)ヒグラシは夕方鳴きます。

話し手は、(13)が発話できるためには、自分の一般的知識領域内に<ヒグラシ>が存在し、かつ聞き手の一般的知識領域内にも<ヒグラシ>が存在すると想定できなければならない。

問題は次のように裸名詞が不定名詞句として機能している場合である。

(14) さっきヒグラシが鳴いていました。

坂原 (1996)は不定名詞句が談話スペースに新たな要素を導入するだけであると述べているが、要素は無制限に導入されるわけではない。(14)の場合もやはり聞き手は<ヒグラシ>という要素を知識内に持っている必要がある。ただし(14)の述語はその時制により、主語に[レベル: 個体]の要素を要求する。そこで、1.2節で定義した非個体・個体関数  $f$  を<ヒグラシ>に適用し、 $f(\text{ヒグラシ})$ を満たす個体を計算により作り

出す。この個体は関数の定義より、{[名前: ?], [カテゴリー: ヒグラシ], [レベル: 個体]}という属性を持つ。談話スペースに書き込まれるのはこの個体である。一般的知識領域の<ヒグラシ>とこの個体は非個体・個体コネクター(C2)によって結合される。

まとめると、裸名詞「X」は一般的知識領域の<X>と同定され、次いで<X>の対応物 X'が一般的知識領域に書き込まれるが、このとき<X>とX'は同一性コネクターC1 または非個体・個体コネクターC2 で結合される。C1 で結合されたとき「X」は総称解釈になり、C2 で結合されたとき「X」は非総称的解釈になる。談話スペースの要素 X'が「X」で指せるのは一般的知識領域の<X>との結合に基づくアクセス原則による。2.2節で見るように、現場スペースの要素が裸名詞で同定されるのも一般的知識領域からのアクセス原則の適用による。これは裸名詞の探索領域に談話スペースや現場スペースも含まれるとする坂原 (1996)の主張と異なる。

## 1. 5 指示詞句

すべての指示詞句には現場スペースを探索する用法、すなわち直示の用法があり、コトソには談話スペースを探索する用法、すなわち照応の用法がある。アには一般的知識領域を探索する用法、すなわち概念指示の用法がある(春木 1991)。ここでは照応と直示に限って述べることとし、アの概念指示の仕組みについては考えない。

談話スペースの要素や現場スペースの要素にはラベルは存在しないと考える。それでは指示詞句と要素の同定はいかにして行われるのか。指示詞句と要素の同定は、単に話し手がどの要素を指そうとしているのかを理解した段階で終了する。例えば「これ」という指示詞句を話し手が用いた場合、聞き手は話し手がどの要素のことを意図しているのが理解できればよい。そこで、談話スペースや現場スペースの要素にはラベルの代わりに指標が存在すると考える。そして指示詞句にも音声化されない指標が存在する。指示詞句「Xi」は指標 i を持つ要素 X'i と同定され、次に X'i の対応物 X''i が談話スペースに書き込まれ、最後に X'i と X''i は同一性コネクター(C3)で結合される。

以上の手続きでは X'i が一般的知識領域の要素と結合されているか

どうかは全く顧慮されない。これを話し手の側から見ると、話し手は聞き手が同定できると想定できる限りにおいて現場スペースや談話スペースの要素を自由に指示詞句で指すことができ、その要素が自分の一般的知識領域に存在するかどうか、また聞き手の一般的知識領域に存在するかどうかは考慮しなくてよいということである<sup>8)</sup>。話し手が指そうとしている対象が同定できれば十分であるとすると、「この猫」のように名詞を主辞(主要部)とする指示詞句の場合、名詞部分(以下 N)は要素の同定に関与しないことになる。これは Corblin (1987: ch. 3) や Larson and Segal (1995: ch. 6)と同様の考え方である。Larson and Segal (1995: 213)は(15)の話し手が *that fox* で指そうとした要素が実はキツネではなくアナグマ(*badger*)であったとしても指示は成功すると述べている。これは指示詞句の指標とその指示対象の指標が一致すれば十分だからである。

(15) *That fox is making a terrible mess.*

ただし、Corblin や Larson and Segal は述べていないが、N は要素の同定に全く関与しないわけではなく、現場スペースと一般的知識領域との結合が関与する場合には極めて重要な役割を果たす。これについては 2.3.2.3 節と 2.3.2.5 節で述べる。

## 1. 6 メタ形式「って」の機能

以上の議論を踏まえると、メタ形式「って」の機能は、談話スペースに不正に書き込まれた要素をマークすることであると言える<sup>9)</sup>。例えば(1)で話し手は「太郎」という固有名詞を使っているが、聞き手は一般的知識領域内に<太郎>という要素が見つからず、「太郎」で指される要素 X' は一般的知識領域の要素との同定を経ずに不正に談話スペースに書き込まれている。そこで、聞き手は不正な書き込みのマーカーとして「って」を用いるのである。(2)も同様である。(3)では話し手が「あいつ」で指そうとした要素を聞き手が一般的知識領域内に見つけれないまま要素が談話スペースに書き込まれており、この不正な書き込みが「って」でマークされている。(16)では話し手が「このダニ」で指そうとした現場スペースの要素を聞き手が同定できないまま要素が書き込まれている。

(16) A: このダニ死んでるのかな。

B: このダニって?

このように考えると(4)の「あの事件の犯人」にメタ形式が必要でない理由は明らかで、話し手は<犯人>という要素を同定できているからである。単にパラメータ「あの事件」のもとで<犯人>と役割・値コネクターで結合されるべき要素が同定できないだけである。疑問形のコピュラ文の主語にメタ形式が必要ない場合のメカニズムについては2.3.2節で詳述する。

## 2 疑問代名詞とコピュラ文の疑問形

### 2.1 「誰」、「何」、「どれ」の探索領域

名詞句にはそれぞれ探索領域が指定されているが、疑問代名詞はどの領域の要素を答えとすべきかを指定する。便宜上これを疑問代名詞の探索領域と呼ぶ。「誰」と「何」の探索領域は一般的知識領域、「どれ」の探索領域は現場スペースまたは談話スペースである。よって、「誰」と「何」に対しては裸名詞または固有名詞で、「どれ」に対しては指示詞句で答えるのが原則である。

「誰」と「何」の違いには二つの要因が関与する。それは、答えとなるべき要素のレベル素性とカテゴリー素性である。まず、答えとなるべき要素のレベル素性の値が「非個体」であれば「何」が用いられる。そして、レベル素性の値が「個体」の要素に関しては、カテゴリー素性の値が「人」であれば「誰」が用いられ、「人」以外であればどの疑問代名詞も不自然になる<sup>10)</sup>。

以上の原則から、次のような質問と答えの対が最も自然であると言える。

(17) A: どれにしますか。

B: これにします。

(18) A: 何がこの世で最も賢いですか。

B: 人間です。

(19) A: 誰がこの世で最も賢いですか。

B: アインシュタインです。

(20) A: フランスの国家元首は何ですか。



B: 大統領です。

(21) A: フランスの国家元首は誰ですか。

B: シラクです。

そして(22)ではいずれの疑問代名詞も用いにくい。

(22) A: {\*何/??誰}がこの障子を破ったの?

B: タマだよ。

## 2. 2 一般的知識領域の要素と現場スペースの要素の結合

人間は自分の知識内にある要素と目の前にある個体が同一であるかどうかを判断することができる。例えば、(23)の存在文は自分の視界に入っている個体が自分の知っている太郎であると認識された場合に発話される(酒井 1999b)。

(23) あ、あそこに太郎がいる。

このあまりに自明な事実を理論的に述べれば、一般的知識領域の要素と現場スペースの要素とが結合され得るということである。この結合は同一性コネクター(C4)によるものと非個体・個体コネクター(C5)によるものがある。こうした結合に基づくアクセス原則を用いると、個体が答えとなっている(17)、(19)、(21)の対話は次のような形を取ることになる。

(17') A: どれにしますか。

B: シヤム猫にします。(C5に基づくアクセス原則による)

(19') A: 誰がこの世で最も賢いですか。

B: この人です。(C4に基づくアクセス原則による)

(21') A: フランスの国家元首は誰ですか。

B: この人です。(C4に基づくアクセス原則による)

## 2. 3 コピュラ文の疑問形

第1節の名詞句の探索領域に関する議論と2.1節、2.2節の疑問代名詞の探索領域についての議論から、コピュラ文の疑問形の容認可能性が斉一的に説明できるようになる。主語名詞句にメタ形式が付いている場合と付いていない場合について順に見ていく。

### 2. 3. 1 「NP って誰／何／どれ？」

先述のように、「って」は談話資源内の要素との同定を経ずに談話スペースに不正に書き込まれた名詞句をマークする。そこで、「NP って？」という質問は、NP を正しく処理できない、すなわち NP の指すべき要素をしかるべき領域で同定できないということの表明である。「NP って？」という疑問文には通常属詞が不要である。これは NP の指定する探索領域により、談話資源内のどの領域の要素が同定できないかが明らかだからである。つまり、どの疑問代名詞が省略されているかが明らかだからである。しかし、随意的に属詞の疑問代名詞を明示することができ、以下ではその場合について論じる。

#### 2. 3. 1. 1 固有名詞

固有名詞は一般的知識領域を探索する。そこで、「NP って？」という疑問文は固有名詞 NP の同定すべき要素が一般的知識領域内に見つからないことを表す。よって NP 位置に人間の固有名詞が生起する場合に属詞を明示したければ、「誰」を用いることになる。冒頭の(1)はその例である。人間以外の固有名詞の場合は、2.1 節で述べたように、「誰」は不可で、「何」も用いにくい。

(24) 太郎って{誰/\*何}?

(25) タマって{\*誰/??何}?

#### 2. 3. 1. 2 裸名詞

裸名詞の探索領域も固有名詞と同様一般的知識領域である。ただしカテゴリーそのものを指す裸名詞、つまり非個体・個体関数の適用のない裸名詞は固有名詞と異なり[レベル: 非個体]であるから、人であれ人以外であれ明示される疑問代名詞は常に「何」である。冒頭の(2)はその例である。

(26) A: スッチーは保安要員として役立ってないし、給仕も下手だ。

B: スッチーって{\*誰/何}?

(27) A: 和明は SE になりたがっているけど、あいつには絶対無理だな。

B: SE って{\*誰/何}?

(28) A: 最近ゲンゴロウが減ってきたようだ。

B: ゲンゴロウって{\*誰/何}?

これに対し、非個体・個体関数の適用により個体を指す裸名詞の場合は、人間であれば属詞は「誰」となる。

(29)A: 昨日スッチーとデートしたよ。

B: スッチーって誰?

(29)は説明すべき問題を含んでいる。(29)の B が知識内に<スッチー>という要素を持っているとしよう。(29)のように裸名詞が特定の用いられている場合は、1.4 節で述べたように、B は A の発話を処理すべく非個体・個体関数  $f$  によって<スッチー>のメンバーである個体  $f$ (<スッチー>)を算出し、<スッチー>と  $f$ (<スッチー>)を非個体・個体コネクター C2 で結合する。この時点で「スッチー」の処理は終了しており、いかなる不正も発生していない。その証拠に、(29)においては、(26-28)などと異なり、B が「NP って~?」という質問を発することなく会話を続けても支障は生じない。例えば B は「その人やっぱり美人?」などと尋ねることもできたのである。とすると、(29B)では正当な書き込みが行われているにもかかわらず不正な書き込みを示す「って」が用いられていることになる。この矛盾をどう説明すべきであろうか。

(29)の処理において<スッチー>と  $f$ (<スッチー>)は非個体・個体コネクター C2 で結合される。これに対して、固有名詞や総称の裸名詞の場合は、一般的知識領域の要素と談話スペースの要素は同一性コネクター C1 で結合される。C1 も C2 も要素を談話スペースに書き込むことを認可することには変わりはないが、C1 は C2 に比べると特定性の強いコネクターであると言える。そこで、B は  $f$ (<スッチー>)が一般的知識領域の要素<スッチー>と C2 で結合されただけでは満足せず、 $f$ (<スッチー>)の一般的知識領域における C1 による対応物、すなわち「より強い対応物」を要求しているのである。例えば、 $f$ (<スッチー>)=花子なのか  $f$ (<スッチー>)= 由美なのかを尋ねているのである。

理論的に「同一性コネクター>非個体・個体コネクター」というコネクターの強さに関する階層を仮定すると、要素の談話スペースへの書き込みにも正当性の階層が存在することになる。つまり、両方のコネクターが使えると想定される場面では、同一性コネクターを用いる方がより正当である。これはグライスの情報量の公理が発動している例で、

両方の情報が利用可能であれば、ある要素を「<スッチー>というカテゴリーのメンバーである」と言うよりは「<花子>である」と言う方が正当なのである。(29)のBはf(<スッチー>)の談話スペースへの書き込みの正当性をより強い基準で判断していると考えられる。f(<スッチー>)の談話スペースへの書き込みは弱い基準に照らせば正当であるが、強い基準に照らせば不当である。Bはこれを強い基準で判断しているため、不当な書き込みを示す「って」を用いているのである。もちろんこれは弱い基準では正当な書き込みであるから、「スッチーって誰?」などと尋ねなくても談話には支障がない。どちらの基準を採用すべきかはひとえに関連性の問題である。Aが与えるべき最大限の情報を与えていないと思えば、Bは(29)のように尋ねるべきである。これはBにスチュワードスの知人が複数いる場合に対応するであろう。逆に、Bにスチュワードスの知人がいなければ(29)のように尋ねるのは無意味である。こうして、強さの異なる複数のコネクターを考慮することにより、理論的には一見矛盾に見えるBの発話が実際には自然な発話である理由が説明できる。

### 2. 3. 1. 3 指示詞句

すべての指示詞句には直示の用法があり、コとソには照応の用法、アには概念指示の用法がある。照応において先行詞が同定できないケースはまれであると思われるので、ここでは直示とアの概念指示の場合に限って考える。

直示の場合、同定すべき要素は現場スペースの要素であるから、直示の指示詞句が「NP って～?」という疑問文の主語となる場合、復元すべき属詞は「どれ」である。

(30) A: あれ見て。

B: あれってどれ?

(31) A: あの人見て。

B: あの人って{どれ/どの人}?

概念指示の場合、同定すべき要素は一般的知識領域の要素であるから、復元すべき属詞は「誰」または「何」である。冒頭の(3)はその例である。

(32)A: あの話どうなった?

B: あの話って何?

(33)A: あの人今どうしてる?

B: あの人って誰?

## 2. 3. 1. 4 探索領域が表面上ミスマッチを起こしている場合

上で見た原則が守られないケースがある。

(34)(複数の人が写った写真を見ながら)

A: 太郎はいつ見てもかっこいいよね。

B: 太郎ってどれ?(原則通りなら「誰」)

A: あれ、きみ、太郎を知らなかったっけ?

(35)A: あれ見て。

B: あれって何?(原則通りなら「どれ」)

A: トリだよ、あそこの。

これらの例を理解するには、2.2 節で論じた現場スペースの要素と一般的知識領域の要素との結合を考える必要がある。2.2 節で述べたように、我々は現場スペースの個体を一般的知識領域の要素と結びつけることができる。変装した人を前にした場合や古い写真を見ている場合など、それが不可能であることもあるが、多くの場合現場スペースの要素と一般的知識領域の要素とを結合する操作は無意識的かつ瞬間的に行われる。そこで、通常話し手は聞き手にそうした結合ができると期待して発話を行う。例えば、(36)の発話を理解するには、聞き手は「あそこ」にいる人物が自分の知っている真由美であることが理解できなければならないが、通常この操作は瞬間的に行われるため意識されることは少なく、話し手も聞き手にそれができることを前提として発話を行う。

(36)あれ、あそこで真由美がピラ配りのバイトしてるよ。

さて、(34)の状況を考えてみよう。A は B が写真に写っている人物の一人が太郎であることを認識できるという前提で話している。これは、この写真が最近取った写りの良い写真であれば、当然期待できることである。B も A がそう期待していることを知っている。理論的には、一般的知識領域の要素<X>(ここでは<太郎>)が与えられれば、そ

の要素から現場スペースの要素 X”(ここでは現場スペース内の写真に写っている人物)への同一性コネクタ C4 または非個体・個体コネクタ C5 に基づくマッピングは原則的に可能であると見なせるということである。(34)では C4 が関与している。固有名詞の処理においては談話スペースの要素 X' と <X> とが同一性コネクタ C1 で結合される。固有名詞が用いられ、かつそれを現場スペースの要素 X” と結合しなければならない場合、聞き手は X' から <X> を経由して X” に至る複合コネクタ C4・C1 を設定しなければならない。(34A)のように固有名詞が目の中の写真の中の要素を指すために用いられた場合などがこれに当たる。(34B)は「どれ」が示すように、この複合コネクタが設定できないことを表明している。さて、一般的知識領域の要素 <X> が与えられれば、C4 は特別の場合を除いて常に設定可能であると述べた。これは C1 が設定できれば C4 も設定でき、C4・C1 が設定できるということである。すると、C4・C1 が設定できないということは、実は C1 が設定できないということに過ぎない。よって C4・C1 が設定できないことを表明することは結局 C1 が設定できないことを表明することになり、(34B)において属詞として「誰」の代わりに「どれ」を用いてもよいということになる。こうして、(34B)は実質的に「太郎って誰?」という原則通りの疑問文と同じ機能を果たす。(34B)が言おうとしているのは「太郎を知っていれば私はこの写真の中から太郎を同定できるはずだが、私は太郎を知らないのだからそれができない」ということである。

次に(35)について考える。一般的知識領域の要素と現場スペースの要素は同一性コネクタ C4 で結合されることもあれば、非個体・個体コネクタ C5 で結合されることもある。すぐ上で見たのは前者の場合であるが、後者も特別の場合を除いて常に設定可能であると見なせる。例えば(37)を理解するためには、聞き手は目の前の要素が[[名前: ?]、[カテゴリー: 猫]、[レベル: 個体]]の要素であることが理解できなければならない。(36)の場合と同様、この操作は多くの場合無意識的かつ瞬間的に行うことができるので話し手は聞き手にそれができることを期待して発話を行う。

(37)あ、猫が魚を取って行った。

さて、(35A)の「あれ」が指標 i を持つとすると、聞き手は「あれ」の指

示対象である現場スペースの要素  $X_i$  を同定し、その対応物  $X'_i$  を談話スペースに書き込む。このとき  $X_i$  と  $X'_i$  は同一性コネクターC3で結合される。(37)に関する議論から、C3が設定されれば通常C5が設定でき、 $X'_i$  から  $X_i$  を経由して一般的知識領域の要素<X>に至る複合コネクターC5・C3が設定できる。(35B)は属詞「何」が示すようにC5・C3が設定できないことを表明しているが、C5・C3が設定できないことはC3が設定できないことに他ならないから、(35B)は属詞に「何」を用いているにもかかわらず実質的には原則通りの疑問文「あれってどれ?」と等価となる。(35B)が言おうとしているのは、「あなたが指そうとしている対象がどれか分かれば私にはその対象の所属カテゴリーが分かるはずだが、あなたがどの対象を指そうとしているか分からないから、私にはその対象の所属カテゴリーも分からない」ということである。

### 2. 3. 2 「NPは誰／何／どれ?」

興味深いことに、主語に「って」の付く疑問文と付かない疑問文は二つの点で相補分布をなしているように思われる。

第一に、これまで見てきたタイプの文脈では「って」のある疑問文が必須であったが、代わりに「って」のない疑問文を用いることは到底不可能である。

(38)A: 和明の怠け者ぶりには感心するよ。

B: \*和明は誰?

(39)A: タガメは魚の血を吸うんだよ。

B: \*タガメは何?

(40)A: あれを見ろ。

B: \*あれはどれ?

第二に、「NP って～?」の形式の疑問文で属詞位置に復元すべきであるのがNPの探索領域と同じ探索領域を持つ疑問代名詞であったのに対し、「NPは～?」の形式の疑問文で属詞位置に復元すべきであるのはNPの探索領域と異なる領域を探索領域とする疑問代名詞である。

(41)和明はどれ?

(42)タガメはどれ?

(43)あれは何?

第一の現象は、「NP は～?」という疑問文が発せられる文脈では NP が正当に処理されていることを示す。第二の現象は、「NP は～?」という疑問文が NP の指示対象の他の領域における対応物を問う疑問文であることを示している。以下、それぞれの名詞句の場合について論じる。

### 2. 3. 2. 1 固有名詞

(38B)が不可である理由を考えてみよう。(38A)の「和明」によって談話スペースに書き込まれる要素を X' としよう。談話スペースへの正当な書き込みが終了した時点では、X' と一般的知識領域の要素<和明>は同一性コネクター C1 で結合されている。C1 を設定することにより正当な書き込みがなされた要素は「って」の付かない裸の名詞句で指される。裸の固有名「和明」は X' が C1 により<和明>と結合されていることを表す。コンピュータ文の属詞位置の疑問代名詞「誰」は X' の一般的知識領域における対応物のラベルを尋ねる。したがって(38B)は「C1 によって<和明>と結合されている X' の C1 による対応物は何か」という無意味な意味構造を持つ。これに対する答えは<和明>でしかありえず、質問自体が無意味なのである。

これに対し、(41)は何ら問題がない。(41)の主語は裸の固有名であるから、話し手はこれを用いる際に一般的知識領域の<和明>のコネクター C1 による対応物 X' を談話スペースに書き込む。属詞の「どれ」は<和明>の同一性コネクター C4 による現場スペースにおける対応物を尋ねる。よって(41)は C1 が設定できた上で C4 を設定するための情報を相手に求める疑問文であるから、(37B)と違って有意味である。(41)は仮装パーティーや昔の写真において和明が同定できない場合などに発話される。

### 2. 3. 2. 2 裸名詞

裸名詞も一般的知識領域を探索するから固有名詞と同様に考えることができる。(39A)の「タガメ」を処理するときには談話スペースには同一性コネクター C1 によって<タガメ>と結合された要素 X' が書き込まれる。(39B)の「タガメ」という裸の形式はこの処理が正しく行われたこと



を示している。一方属詞の疑問代名詞「何」は X' の C1 による一般的知識領域における対応物のラベルを尋ねる。よって(39B)は「C1 によって <タガメ> と結合された X' の C1 による対応物は何か」という無意味な質問になる。

一方(42)は C1 が設定できた上で <タガメ> の非個体・個体コネクター C5 による現場スペースにおける対応物を探しているので有意義な質問である。

(39)では裸名詞の総称解釈が問題となっていたが、裸名詞の特定の解釈の場合はどうであろうか。興味深いことに、裸名詞が「NP は誰／何?」の NP として生起する場合、特定の解釈はほぼ不可能である。例えば、(44B)は不自然であり、この文に(29B)や(45)の解釈をするのは極めて困難である。

(44)A: 昨日スッチーとデートしたよ。

B: \*スッチーは誰?

(45)そのスッチーは誰?

これは驚くべきことである。なぜなら、(46B)のような通常のコピュラ文であれば、(47)のような特定の解釈が可能だからである。

(46)A: 昨日スッチーとデートしたよ。

B: やっぱりスッチーは高慢だった?

(47)やっぱりそのスッチーは高慢だった?

ではなぜ(44B)は特定の解釈できないのか。(44A)の処理において <スッチー> と非個体・個体コネクター C2 で結合された f(<スッチー>) が談話スペースに書き込まれる。(44B)の「スッチー」という裸の形式はこの処理が行われたことを示している。一方属詞の「誰」は f(<スッチー>) の一般的知識領域における「レベル: 個体」という属性を持つ対応物を探る。つまり、f(<スッチー>) の同一性コネクター C1 による対応物を探る。問題はなぜ(44B)に「花子だよ」などと答えることができないかである。同じ文脈で(29B)が可能であることに注目すると、(44B)が不可である理由は明らかに「って」がないことである。2.2.1.2 節で(29B)が可能なのはコネクターの正当性に関して強い基準を採用し、C2 を不当として C1 の設定を要求するからであると述べた。とすると、(44B)が不可であることを示すためには、C2 が正当でかつ C1 も正当

であるような状況を許してはならないことになる。そこで、一つの名詞句の処理において正当に設定されるコネクターは 1 本に限られるという制約を設ける。つまり、談話スペース内の要素とある談話資源内の領域の要素とを結合するコネクターは 1 本に限られるということである。(44B)は C2 を正当としたまま C1 をも要求しているために不自然なのである。次の例も同様にして説明できる。

(48) A: 昨日フィンランド大統領に会ったよ。

B: フィンランド大統領{\*は/って}誰?

### 2. 3. 2. 3 指示詞句

(40A)の「あれ」が指標  $i$  を持つとすると、「あれ」は現場スペースの要素  $X_i$  と同定され、その対応物  $X'_i$  が談話スペースに書き込まれる。 $X_i$  と  $X'_i$  は同一性コネクター C3 で結合される。(40B)の裸の形式「あれ」はこの処理が行われたことを示している。一方(40B)の「どれ」は  $X'_i$  の C3 による現場スペースにおける対応物を尋ねる。よって(40B)は「 $X_i$  と C3 で結合された  $X'_i$  の C3 による対応物は何か」という無意味な質問になる。答えは  $X_i$  に決まっているのである。これは要するに(40B)の質問者が「あれ」の指示対象が同定でき、かつ同定できないという矛盾した状況に対応する。

一方(43)は  $X'_i$  と C3 で結合された  $X_i$  の非個体・個体コネクター C5 による一般的知識領域における対応物のラベルを問う文であるから問題はない。(43)に対しては例えば「UFO だ」などと答えることができる。下の(49A)は  $X'_i$  と C3 で結合された  $X_i$  の同一性コネクター C4 による一般的知識領域における対応物のラベルを問う文であるが、C5 が C4 になっている点を除けば(43)と全く同じように説明できる。

(49) A: あれは誰?

B: 彩子じゃないかな。

上の(45)の「そのスッチャー」は談話スペースの要素を指している。この指示詞句が指標  $j$  を持つとすると、(45)は談話スペースの要素「そのスッチャー  $j$ 」の同一性コネクター C1 による一般的知識領域における対応物のラベルを尋ねている。

現場スペースの要素が「この/その/あの N」のような要素の所属カ

テゴリーの指定を持つ指示詞句である場合、一般的知識領域の要素との結合においてNの部分の記述が対応物の決定に本質的に効いてくる。Nによって答えとなるべき要素に制限が加わるのである。一般に「この／その／あのN」とNとの結合は許されず、「この／その／あのN」はNを含むカテゴリー階層においてNより下に位置する要素としか結合できない(酒井 1999a, 1999b)。そこで、次の結果を得る<sup>11)</sup>。

(50)A: あの動物は何ですか?

B: {\*動物／猫／シャム猫／??タマ}です。

(51)A: あの猫は何ですか?

B: {\*動物／\*猫／シャム猫／??タマ}です。

「あの動物」の指示対象は動物であるにもかかわらず<動物>とは結合されず、「あの猫」の指示対象は猫であるにもかかわらず<猫>とは結合されない。「タマ」が答えとして不自然なのは、2.1節で述べたように、疑問代名詞「何」が生物の個体には用いられにくいからである。

#### 2. 3. 2. 4 一般的知識領域の下位領域間のマッピング

一般的知識領域内にはさまざまな下位領域が存在し、その中の要素は互いに語用論関数で結合されうる。例えば作家の領域の要素と作品の領域の要素とは役割(関数)「作品」で結合され、国家の領域の要素と人間の領域の要素は役割「大統領」で結合されうる。役割はある領域の要素を別の領域の要素にマップする関数であると解釈できるが、Fauconnier (1985: ch. 2)の言うように役割自体も役割・値コネクター(C6)により値と結合される<sup>12)</sup>。役割には明示的な名前が存在しないこともある<sup>13)</sup>。

コンピュータの機能の一つはこれらの結合を述べることである。(52-56)はその例である。

(52)シェイクスピアは『ハムレット』だ。(作家—作品; 役割「作品」による)

(53)太郎は織田信長だ。(人間—演劇の登場人物; 役割「役」による)

(54)良太は小学校教師だ。(人間—職業; 役割「職業」による)

(55)フランスはシラクだ。(国家—人間; 役割「大統領」による)

(56)大統領はシラクだ。(役割—値)

2.1 節で述べたように一般的知識領域を探索する疑問代名詞は「誰」または「何」であるが、下位領域の探索にいちいち別の名詞限定表現が用いられないのと同様、下位領域にいちいち別の疑問代名詞を割り当てるという不経済なことは行われぬ。そこで、2.1 節の原則に従い、(52-56)に対応する疑問文はそれぞれ(57-61)である。

(57) シェイクスピアは何?

(58) 太郎は誰?

(59) 良太は何?

(60) フランスは誰?

(61) 大統領は誰?

(57-60)は主語名詞句で指される要素の役割関数による対応物を尋ねる文であり、(61)は役割の役割・値コネクターC6 による対応物を尋ねる文である。(57-61)の質問者はそれぞれ<シェイクスピア>、<太郎>、<良太>、<フランス>、<大統領>という要素を一般的知識領域内で同定できているから、メタ形式は必要ない。冒頭の(4)も同様にして説明できる<sup>14)</sup>。

さて、(61)と(44B)、(48B)の容認度の違いを考えよう。話し手が(61)を用いる際に「大統領」は<大統領>と同定され、<大統領>の対応物 X' が談話スペースに書き込まれる。<大統領>と X' とは同一性コネクター C1 で結合される<sup>15)</sup>。ここで役割・値コネクターC6 と 2.3.2.2 節の C1 との区別に注意しなければならない。C1 と C2 はともに談話スペースの要素から一般的知識領域の要素へのコネクターであるが、C6 は一般的知識領域の要素から一般的知識領域の要素へのコネクターである。このため、2.3.2.2 で提示した制約は C1 と C2 に対しては適用されるが、C1 と C6 とに関しては適用されない。つまり、C1 を正当と見なし、かつ C6 を正当と見なしでも問題はない。よって表面上(44B)や(48B)に似ていながら、(61)は容認可能なのである。このように、同じ統語形式を持つコピュラ文であっても文脈によって用いられるコネクターが異なり、用いられるコネクターの違いが文の容認度を変えることがある。類似の例をもう一つ挙げると、「太郎は誰?」という文は(1)の解釈では不可であるが、(58)の解釈では問題がない<sup>16)</sup>。

## 2. 3. 2. 5 現場スペースの下位領域間のマッピング

一般的知識領域に下位領域が存在するのと同様、現場スペースにも下位領域が存在する。現場スペースの下位領域は一般的知識領域の下位領域のように多様ではなく、ほぼイメージの領域と現実の領域に限られる。Fauconnier (1985)の言うように絵や写真は領域を形成する。そこで、絵や写真を現場スペースに置くと、現場スペースは絵や写真の領域とそれ以外の領域、つまり現実の領域に分割される。これらの領域の要素は互いにイメージコネクター(C7)で結合される<sup>17)</sup>。次の文はそのような結合を表現している。

(62) あれはこれだ。(実物—写真)

(63) この人はこの人だ。(実物—写真)

現場スペースを探索する疑問代名詞は「どれ」であり、これは下位領域によって変わることはない。したがって(62-63)に対応する疑問文はそれぞれ(64-65)である。

(64) あれはどれ?

(65) この人はどの人?

これらの文の質問者は「あれ  $i$ 」、「この人  $j$ 」の指示対象  $X_i$ 、 $X_j$  を現場スペースにおいて同定し、 $X_i$ 、 $X_j$  の対応物  $X^i$ 、 $X^j$  を談話スペースに書き込むことができている。つまり質問者は、 $X_i$  と  $X^i$ 、 $X_j$  と  $X^j$  を結合するコネクターC3 を正しく設定している。このため(64-65)ではメタ形式が必要ない。そうした上で、 $X_i$ 、 $X_j$  のC7による写真スペースにおける対応物  $X^i$ 、 $X^j$  を尋ねている。C3 は談話スペースの要素から現場スペースの要素へのコネクターであり、C7 は現場スペースの要素から現場スペースの要素へのコネクターであるから 2.3.2.2 節の制約は C3 と C7 に対しては適用されず、C3 を正当としてかつ C7 の設定を要求することに問題はない。よって、(1)の解釈では不可であった「太郎は誰?」が(58)の解釈では容認可能であるのと同様、(40)の解釈では不可であった「あれはどれ?」が(64)の解釈では容認可能である。

現場スペースの下位領域間のマッピングは酒井 (1999a)で論じたように一般的知識領域を經由する場合もある。紙幅の都合で詳細は省略するが、これと現場スペースの「この/その/あの  $N$ 」から一般的知識領域の  $N$  へのマッピングの禁止により、次の事実が説明できる。

(66)A: (三毛猫のタマを指して)この動物はどれ? (実物一写真)

B: ことです。

(67)(66B)の「これ」の可能な解釈

- a. これ=写真の中の三毛猫のタマ
- b. これ=写真の中の三毛猫のシロ
- c. これ=写真の中のシャム猫のアンジェラ
- d. \*これ=写真の中の犬のポチ

(68)A: (三毛猫のタマを指して)この猫はどれ? (実物一写真)

B: ことです。

(69)(68B)の「これ」の可能な解釈

- a. これ=写真の中の三毛猫のタマ
- b. これ=写真の中の三毛猫のシロ
- c. \*これ=写真の中のシャム猫のアンジェラ
- d. \*これ=写真の中の犬のポチ

(70)A: (三毛猫のタマを指して)この三毛猫はどれ? (実物一写真)

B: ことです。

(71)(70B)の「これ」の可能な解釈

- a. これ=写真の中の三毛猫のタマ
- b. \*これ=写真の中の三毛猫のシロ
- c. \*これ=写真の中のシャム猫のアンジェラ
- d. \*これ=写真の中の犬のポチ

### 3 結論

名詞句は処理される際に談話資源内の要素と同定され、その談話資源内の要素のコネクターによる対応物が談話スペースに書き込まれる。聞き手がこのコネクター設定を行うことができず不正に書き込まれた名詞句は義務的にメタ形式「って」でマークされる。聞き手は「NPって～?」と尋ねることにより、しかるべきコネクター設定ができないことを表明する。一方「NPは～?」という疑問文はNPの指す要素が正しく同定できていて、かつ何らかの関数によるその要素の対応物を問う疑問文である。これには別の領域における対応物を問う場合と同一領域の別の下位領域における対応物を問う場合とがある。これと名詞句お

よび疑問代名詞の探索領域を考慮することにより、コンピュータ文の2種類の疑問形の分布が正しく説明できる。2種類の疑問形のいずれの意味構造を考察する場合にも、現場スペースの要素と一般的知識領域の要素との結合を考慮する必要がある。「NPは～?」に関してはその結合に対する制約をも考慮する必要がある。

また、名詞句解釈におけるコネクター設定に関する制約を提示し、同じ統語形式を持つ疑問文であっても、使用されるコネクターにより容認度が変わりうることも論じた。これはメンタル・スペース理論が一貫して主張する意味構築過程の研究の重要性を改めて明らかにする。

## 注

- 1) もちろんメタ形式が付くのは対話の相手の言葉に限られない。第三者の用いた言葉を引用する場合は(i)のように談話の冒頭でメタ形式が現れることもある。  
(i) 今急に思ったんだけど、人生って何なんだろうね。  
「とは」を「って」の文語体と考えると、「文学とは何か」、「歴史とは何か」なども第三者の言葉の引用と考えられる。
- 2) 本稿では坂原 (1996)の用語に変更を加える。本稿の「談話スペース」は坂原の「談話記憶」に、本稿の「現場スペース」は坂原の「発話状況」に対応する。なお、Fauconnier (1985)の言うメンタル・スペースはほぼ本稿の談話スペースに対応する。
- 3) レベル素性の値は個体と非個体だけで十分であり、非個体を種と下位種などに分ける必要はない。一般に主語として個体のみを許す述語や非個体のみを許す述語は存在するが、種のみを許す述語や下位種のみを許す述語は存在しない。例えば Corblin (1987: ch. 2)はフランス語の動詞 *abonder*「あれふる」の主語は個体であってはならず、常に下位種または種であると述べているが、フランス語においても主語として下位種または種のみを許すような述語は存在しないと思われる。
- 4) [名前: ?]は、非個体・個体関数が値の名前素性を定義しないことを表す。
- 5) これ以降コネクターには登場順に名前をつける。初出の名前は括弧に入れて示す。ここで本稿で使われるコネクター名をまとめておく。  
C1: 一般的知識領域-談話スペースの同一性コネクター

- C2: 一般的知識領域-談話スペースの非個体・個体コネクター
- C3: 現場スペースまたは談話スペース-談話スペースの同一性コネクター
- C4: 一般的知識領域-現場スペースの同一性コネクター
- C5: 一般的知識領域-現場スペースの非個体・個体コネクター
- C6: 役割・値コネクター
- C7: イメージコネクター

6) アクセス原則 (Fauconnier 1997)

二つの対象  $a$  と  $b$  とが、コネクター  $F$  によってリンクされている ( $F(a)=b$  という関係が成り立っている) ならば、 $a$  の名前や記述、また  $a$  を指す(指示する)ことによって、 $a$  の対応物である  $b$  を同定することができる。

(三藤 1999 : 80)

- 7) ここで言う固有名詞はラベルとしての固有名詞であり、名前素性の値としての固有名詞ではない。後者は聞き手の知識状態を考慮せず自由に用いることができる。両者の差は次の対話の対に反映される。
- (i) A: 昨日太郎に会いました。  
B: 太郎って誰ですか?
- (ii) A: 昨日太郎という人に会いました。  
B: ?太郎って誰ですか?
- 8) これは(i)が不自然であるのに対し(ii)が自然であることを説明する。
- (i) ??私はヒグラシを知らない。  
(ii) 私はこのセミを知らない。
- 9) 不正に書き込まれた名詞句は必ず「って」でマークされるが、この逆は成り立たない。くだけた口語体では正当に書き込まれた名詞句が「って」でマークされることがある。
- (i) シヤム猫ってそんなにかわいいですか? 私、どうしてもかわいいと思えないんですけど。  
(ii) それって救いようがないよね。  
注目すべきことに、こうした「って」を含む文も相手に質問をしたり同意を求めたりするのでなければ容認度が落ちる。
- (iii) ??シヤム猫ってかわいい。  
(iv) ??それって救いようがない。



こうした用法を含めた「って」の本質的機能は本稿では考察しない。また本稿の対象とするコンピュータ文の疑問形では正当に書き込まれた名詞句が「って」でマークされることはないので、本稿では不正な書き込みが「って」の使用の十分条件であるだけでなく必要条件でもあるとして議論を進める。

- 10) 実際には指示詞句を答えとする疑問代名詞にもさらなる区別が必要である。コンピュータ文以外では生物の個体には「どれ」は用いられず、「どの N」が用いられる。本稿では「どれ」に「どの N」も含まれるものとする。
- 11) ここでは「この／その／あの Nは何(ですか)?」という疑問文の重要な解釈の一つをあえて考慮外としている。それは「この／その／あの Nは何者(ですか)?」あるいは「この／その／あの Nはなぜここ／そこ／あそこにいるのですか?」などと言い換えられる解釈である。これは質問というより、「この／その／あの N」が「ここ／そこ／あそこ」にいることに対する驚き・不審の表明であり、字義通りの答えを要求するものではない。(51A)の疑問文がこうした意図で発せられたとすると、「シャム猫です」も含めて(51B)の返答はいずれも外的外れなものとなる。また、電車内で痴漢行為に遭った女性が「何よこの人!」などと叫ぶのもこの用法の延長上にあると思われる。この女性は「この人は会社員です」などといった答えを期待しているのではない。しかし、本稿ではこの用法は考慮しない。
- 12) Fauconnier (1985: 42)はこの事実を次のように表記している。

(i)  $F(r, m) = r(m)$

ただし  $F$  は役割・値コネクター、 $r$  は役割、 $m$  はパラメータである。よって、値を  $v$  とすると、役割と値の関係は次の二通りの方法で書ける。

(ii)  $r(m) = v$

(iii)  $F(r, m) = v$

(ii) では役割がパラメータを値にマップする関数であると解釈されており、コネクターで結合されるのは  $m$  と  $v$  である。この結合を表現したのが(55)のようなコンピュータ文である。(55)はいわゆるウナギ文である。(iii) では  $F$  が役割とパラメータを値にマップする関数であると解釈されており、コネクターで結合されるのはパラメータ  $m$  における  $r$  と  $v$  である。この結合は(iv)のコンピュータ文で表現される。

(iv) フランスの大統領はシラクだ。

パラメータ「フランス」を自明として省略すると(56)を得る。一方役割「大統領」を自明として省略するとウナギ文(55)を得る。以上からウナギ文を得る方法は技術的には二通りあることが分かる。坂原 (1990)は暗黙のうちに後者の方法を採用している。

13) 坂原 (1990)の言うように、典型的なウナギ文「私ほうなぎだ」では私をうなぎにマップする適切な関数名が存在しない。

14) (48)を見ると役割を主語とする疑問文は(4)のように会話の冒頭でしか使えないように見えるが、実はそうではない。(48)のように相手の言葉に忠実照応するのは無理であるが、(i)のように連想照応するのは可能である。

(i) A: フランスでは 1958 年に第五共和政が始まったんだよ。

B: そのときの大統領は誰?

また、連想照応では文脈の導入する領域により裸名詞が特定の解釈できる。例えば参加者の中にスチュワーデスが日替わりで一人だけ含まれる決まりになっている合コンがあるとしよう。このとき、

(ii) A: 昨日例の合コンに行って来たよ。

B: スッチーは誰だった?

という対話においてBの「スッチー」は「昨日の合コンのスッチー」と解釈されるため、(44B)と異なり特定の解釈が可能である。

15) 実際には(61)の「大統領」は文脈の設定するパラメータにより「フランス大統領」などと解釈される。というより、こうした文脈が整っていなければ(61)を発話することはできない。そこで、名詞句「大統領」により同定されるのは正確には<フランス大統領>などである。

16) (1)が不可である理由については 2.3.2.1 節を参照。

17) 酒井 (1999b)は、実物とイメージは直接的に結合されることはなく、常に一般的知識領域の要素を介して結合されると述べているが、この議論は本稿の論旨とは無関係なので、ここではより単純な直接的結合を仮定する。

## 参考文献

- Corblin, F. (1987): *Indéfini, défini et démonstratif*, Droz, Genève-Paris.  
Fauconnier, G. (1985): *Mental Spaces*, MIT Press; Cambridge University

- Press, 1994.
- Fauconnier, G. (1997): *Mappings in Thought and Language*, Cambridge University Press.
- 春木 仁孝 (1991): 「指示対象の性格からみた日本語の指示詞—アノを中心に—」、『言語文化研究』第 17 号、93-112、大阪大学
- Larson R. and G. Segal. (1995): *Knowledge of Meaning*, MIT Press.
- 三藤 博 (1999): 「談話の意味表示」、『談話と文脈』、岩波講座『言語の科学』第 7 巻 第 2 章、岩波書店
- 坂原 茂 (1990): 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」、『認知科学の発展』第 3 巻、29-66、講談社サイエンティフィック
- 坂原 茂 (1996): 「英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係」、『認知科学』Vol. 3 No. 3、38-58、共立出版
- 酒井 智宏 (1999a): 「認知マッピングと日本語の存在文」、TACL 4 月度例会口頭発表ハンドアウト
- 酒井 智宏 (1999b): 「認知マッピングに対する制約と日本語の存在文」、日本言語学会第 119 回大会予稿集
- 田窪 行則 (1989): 「名詞句のモダリティ」、in 仁田義雄、益岡隆志 (編)『日本語のモダリティ』、211-233、くろしお出版
- 田窪 行則 (1990): 「対話における聞き手領域の役割について」、『認知科学の発展』第 3 巻、67-84、講談社サイエンティフィック